

天明狂歌とは何か

—その逆説的本質について—

石 上 敏

徳川幕府が、征夷大將軍システムの機能のために命脈を保たせ、ついに自縄自縛の陥穽ともなった〈天皇〉にまつわる諸々の事象を仮装するというきわどい〈遊び〉に対して過敏に反応し、殊更に苛烈な対応をして見せたのはおそらく偶然ではない。貝合せをし、歌合せをし、宮廷歌人に仮装してみせる、幕臣・藩士らをその中心に含む一群を、幕府当局がどれだけにががしく感じていたことか。

一例のみ挙げよう。天明狂歌の中心人物の一人であった元木網の妻すめは、狂名を「智恵内子」といい、天明狂歌中女流の第一人者であった。しかし、当時この狂名を見た者はおそらく間違はなく「智子内親王」を思い浮かべたのではなかったか。即ち、宝暦十二年に踐祚し、翌十三年に即位した後桜町天皇の前名である。後桜町は明和七年まで在位するのだから、古い話ではない。それどころか、智恵内子が草創期の狂歌壇に元木網とともにこの名で

加わったのは明和六年頃であり、後桜町は未だ天皇の位にあった。アナグラムめいたこの狂名「ちえのないし」は、しかとは尻尾をつかませぬものの、明らかに〈天皇〉にまつわる何事かを茶にした戯名であった。無論ここには、後桜町がその生涯に千数百首の歌を残したほど和歌に堪能であったこともまた十分に意識されていたであろうけれども。

二

天明期という特徴的な社会相を象徴する文芸として、歴々黄表紙と狂歌とが挙げられて来た。元号という記号を構成する〈天〉と〈明〉、これら二文字の外延そのままにどこか手放して能天気な明るさが一七八〇年代（天明年間）の江戸を覆っていると言つて、大方の賛同を得られるに違いない。それは田沼政権の放恣なイメージと重なりつつ、次に控える松平政権の緊縮財政・綱紀粛正策との対照に於て一層際立った印象を醸しているのであるが、そのような明るさのイメージの少なくない部分を、この十年程の

間に書かれ版行された文芸が負っているのもあった。そして、その中心とされて来たのが、談義本でも洒落本でもなく、俳諧でも前句付でもなく、黄表紙であり狂歌なのである。

私たちは、この時期を含んではほ一八世紀にすっぽりと収まる時間帯が、専ら暗く空疎なイメージとして把握されて来た文学史の短くない歴史を知っている。しかしそれは、それぞれ数名ずつの著名な作者を輩出した元禄期・化政期という二つの時間に集中的に照明が当てられた反作用としてのイメージに過ぎなかったことを現在理解している。

《史》が、どこまでも史観という名の《観》イメージに保証されてのみ自立し得る言説である以上、《歴史》とは、畢竟選択されたイメージの連続（と断絶）以外の何物でもなく、文学という社会現象の《史》もその例外ではあり得ない。

天明狂歌が天明狂歌としての独自性を保ち得た（と、現在一般にイメージされている）のは、それら狂歌群の風体の独自性（というイメージ）もさることながら、むしろそれらが生み出された《場》の特殊イメージに拠る所が大きい。その《場》は「運動」と呼ばれたり、或いは「連」と呼ばれたりして来た。そしてその《場》とは、徹頭徹尾、かつて文学の《史》に出現したものの、やつし（仮装）であった。それがなぜこの場合に限って特殊なのか。もちろん、時代の《想》がそう見せるのである。ならば《天明》は狂歌の《史》にとってどのように特殊であったのか。

実際、天明狂歌の担い手たちは、その独自性を主張してやまなかったが、その主張は、丁度この時期にピークに達した、「江戸っ子」という詞の發生に象徴される江戸者たちによる《江戸》の独自性・優位性の主張とバラレルな関係にあった。その意味で、天明狂歌が「江戸天明狂歌」と《江戸》を冠して呼ばれることは故なきことではない。まずここに天明狂歌が江戸天明狂歌として論ぜられる必然がある。しかし、天明狂歌という呼称は、なべて包括的な呼称がそうであるように、同時代（天明期）に現れたものではない。管見の限り、天保期を中心に、回顧の対象としての「天明」という象徴的な年号を、回顧の対象としての狂歌の風体に冠したものが、天明狂歌という術語の先駆的な用例であった。即ち天明狂歌とは、そもそも《史》という遠景の内にもみ存在する風景の呼び名であった。確かに天明狂歌には、《江戸》という都市、《天明》という時代相を象徴する何かがあったのである。

三

天明狂歌は、この期の江戸文芸全般がそうであるように、同時代の上方文芸とはその内実・性質を違える。当代の江戸・上方以外の狂歌は無視が許される程量的に些少、かつ質的に無特徴であったから、いま上方狂歌のみを対照すれば、そこには貞柳一派の規範が確固として在ったが故に江戸天明狂歌的な性格の混入は他の地域よりも遅れたし、それらは終に江戸狂歌と同質化しな

かった。天明狂歌の発生以降、上方狂歌の記述もそこそこに急速に江戸中心に記述される一般的な文学史(狂歌史)からは読み取り難いが、実は江戸狂歌の方が高速度で変質を遂げ、天明狂歌的なものはみるみる解体して、上方までの波及力は持ち得なかったのである。断っておくが、私はここで、寛政改革で見せしめ的に爾正の標的とされた狂歌が、戯作同様に変質を余儀なくされたという類のことを言いたいわけではない。

そして、その速度は、従来のような参考書に背かれていたよりも(大半の狂歌概説は、四方赤良と朱楽菅江の天明五年刊『徳和歌後万載集』編集にまつわるばやきを挙げるのみであるが)速かったと考えられる。そのことは後に論ずるとして、現象面に目を向けるならば、天明狂歌は、解体に乗じるものと歯止めをかけようとするものとに分かれて、それぞれの側でそれぞれの速度で崩壊して行った。その崩壊・解体の過程で、広く(より正確には、ピンポイント的に)各地を巻き込みながら、地域毎に伝播者の流派・伝播の時期・地方の固有性などによって少しずつ異なった変質の様相を見せて、しかしやはり狂歌の(天明性)は、高速度で崩壊して行ったのである。―これは見方を変えれば、化政調・天保調の確立と崩壊の過程であったという言い方も出来るわけだが。

では天明狂歌の解体に歯止めをかけようとする勢力、即ち石川雅望を中心とする一派が、天明狂歌性を保持し継承し得たかと言

えば、そうではなかった。むしろそれを保持し得なかったという事実の内にこそ、天明狂歌の本質は示されている。雅望らが保持しようとしたものは、狂歌の風体そのものであるより、石川淳の所謂「運動」(江戸人の発想法について)、言い換えれば狂歌創出の(場)であった。田中優子氏はこれを「連」というチームで析出して見せたが(「江戸の想像力」など)、こと天明狂歌に限って言えば、それは当代学芸の一般的な創出形態であった「連」とは些か性質を異にしていた。端的に言って、天明狂歌とは徹頭徹尾王朝和歌のやつし「パロディ」であったということ、つまり「連」の「連」、いわばメタ連であったということである。しかしここに陥罪はあった。換言すれば、その逆説の内にこそ、天明狂歌の本質はあった。ここで大田南畝の一言に耳を傾けてみたい。

日本大きに狂歌はやり、別て東都に上手多く、かりにも落書などいふ様な鄙劣な歌をよむ事なき正風体の狂歌連中……

(天明二年刊「江戸花海老」序)

これが、「おほよそ狂詠は時の興にてよむなるを、ことがましくつどひをなして詠むしれ者こそをこなれ。我もいざしれ者の仲間入せん」(「弄花集」序)と、天明狂歌の源流とも呼ぶべき新しい狂歌の(場)に参入するに当たって宣言した南畝の言であった。しかもこれは、従来、天明狂歌の実質的なスタートの年であると取り沙汰されて来た天明三年前夜の言なのである。

「正風体」とは落書体に対する品格、というよりむしろ狂歌を

詠む姿勢を言ったものであるが、それは早くから江戸狂歌の担い手としてその中心にいた南歌のセクト主義・占有意識を端なくも物語っている。南歌自身、これらの極点を愛憎同居的に揺れながら、寛政改革を渡りに船と狂歌壇の一线から退場するまで、その〈場〉に倦怠感を募らせて行つたわけである。そして、南歌を最大のオビニオンリーターとする天明狂歌師たちは、例えば右の発言に即して言えば、反落書体・正風体という掛声を金科玉条として、容易にその〈制度〉に格め取られていった。

つまり天明狂歌は、その人的象徴たる大田南歌の内にすら既に解体の契機を含む、実に危うい〈運動〉であつた。別の言い方をすれば、天明狂歌を特徴づけるやつしの論理は、言説の形では（いかに南歌の力をもってしても、ということとは実質的に）伝達不可能であつた。それは、例えば、ある「会」の空気を反映した、ある一首の狂歌の内にしか存在し得ない反論理的な論理であつた。これは、天明狂歌のテンションの高さがもたらした自ずからなる帰趨であり、そのような反復・継承の不可能性の故にこそ「天明狂歌」という特殊なチームが而立し得ている。例えば、白鳳文化・元禄文化という言い方はある。しかし、近世期に限らず、果たして単独のジャンルが年号を冠した呼称を持ち、それが現代に至るまで通用しているという事例が、他にあるだろうか。

更にもう一つ、これもまた天明狂歌の特色として肯定的に把握されて来た、社会的な階層を越えた〈運動〉の拡がりという要素

がその解体を促めた。江戸狂歌以前に完成を見た上方狂歌が、まがりなりにもそのスタイルと一定の歌格を長く維持出来たのは、限られた社会階層・教養レベルの人々によつて独占されていたからに外ならない。その特権的な〈場〉でこそ、狂歌の論は大まじめで論じられ得たのであり、しかしそれらを論ずる人々が限定されてきたが故に論は一般に波及して行かなかつた（その意味で、上方狂歌はまさに伝統的和歌の血脈を引いていた）。この例に照らすまでもなく、もし天明狂歌の担い手たちが（その出発時のように）同程度の教養の層に限られていたならば、おそらくこの時期の狂歌は、そのテンションの高さを独占的に（幾らか）長く保ち得ただろう。しかしそうであれば、〈天明狂歌〉などという呼称を与えられることはなかつただろうし、和学者グループの余技という一つのエピソードで済まされてしまつたであろうけれども。

ある文芸形態の（享受層ではなく）創出母体の教養に、大きな落差がある。その内部で発信された言説が、創出層にすら真つ当に伝わって行かない。このことの含む意味は、やはり小さくない。従来このことは、南歌たちの退散の理由としてのみ言われて来たわけであるが、むしろ天明狂歌の本質を考える上で、改めて注目すべき現象であろう。

和歌、もしくはそれが志向・体现する〈雅〉へのカウンターカルチャーとしての狂歌という構図では解き得ない天明狂歌の内実とは、それらをはじめから〈雅〉を指向する契機を内包していた

という倒立性である。天明期以後の天明狂歌の変質とは、そこに何らかの新しい要素が付加されたことよって生じたのではない。権威化・月並化・硬直化、その全ては既にして天明狂歌的なるものの内に在った。即ち、天明狂歌の《運動》とは、新たな狂歌理念の獲得へのダイナミズムではなく、狂歌の本質の解体の過程、これをしもダイナミズムと呼べるのであれば、その変成過程を指して呼ばれるべきものであった。何の技巧も包含せず、何の理念も伴わぬものとして大手を振って開陳されてよい、敢えて言えば落書よりも非文芸的である文字の連なりに保証された変質の過程、その全体像こそが天明狂歌なのである。

例えば、天明期以降に狂歌を指していわゆる「たはれうた」には、本来の字義の「戯歌」とは別に、自嘲を込めた「痴歌」「呆歌」「惚歌」などが重ねられていたことが、当時の用例より確認出来る。確かにそれらは、南畝や蒼江が早く決めたように、夥しく垂れ流される、なにやら狂歌らしきものの総称なのであった。

四

天明三年正月刊の『万載狂歌集』が天明期の狂歌ブームに火を点けたという事情は、当代からの多くの証言もあって動くまい。しかし一方で、この年三月、『万載狂歌集』の版元でもある高屋重三郎他から、『狂歌よみ方引歌』と副題した元木網編『浜のき

さこ』が出されていることは注目に値する。「よみ方の心得」に始まるこのハンドブックは従来等閑視されて来たが、天明狂歌の実態を知る上で重要な位置を占める（これが等閑視されて来たというところが、従来の天明狂歌観の内実を物語っている）。

編者の元木網は、この年七月成の狂歌師名鑑『狂歌師細見』に、江戸中の半分が門人であると記された如く、狂歌壇に於ける実質的な影響力（つまり、南畝の位相とは些か異なつて）の強大な狂歌師であった。『狂歌師細見』に先んじて四月に成った『狂歌知足振』では、他の狂歌連がそれぞれの名称で呼ばれる中、木網のグループは冒頭から名称なしで記載され、明らかに主流派の扱いを受けている。

この『浜のきさこ』が出されて暫く類書の出版を見ないことは、予測される需要に鑑みて、この書が天明期狂歌師たちの殆ど唯一のガイドとなったことを物語っている。ほぼ十年後から、この書のひそみに倣って、雨後の筈のように狂歌手引書の類が出されたことも、この書の長く続いた規範力を示唆するであろう。例えば、既に天明初年に南畝の行き方に異を唱えていた唐衣橘洲の『狂歌初心抄』（寛政三年）、かつて南畝と最強のタッグを組んだ朱染菅江の『狂歌大体』（同年）などが狂歌の制度化の過程から生まれ、その後の狂歌の方向を重ねて規制して行くことになったのである。ただし、より重要なことは、それより十年前、従来の《文学史》では天明狂歌出發のメルクマールと見做される天明三年に、

保守的かつ功利的、いわば従来のイメージでは最も反・天明狂歌的なガイドブックが、天明狂歌の表質的中心である元木網によって書かれていたという事実である。

この書的重要性は、それだけにとどまらない。更に注意すべきは、この書に序文を添せて木網の姿勢に賛同の意を表したのが、外ならぬ四方赤良だったことである。先に赤良の立場を代弁する言は聞いた。ここでは木網の立場を最もよく象徴する言を引く。

狂歌に法なしといへども歌にすがりてよみ、歌の式によるべし。

これが元木網の、天明三年時の言である。パロディでも洒落でもなく、彼はだまじめに語っている。しかし、これ全く貞徳・行風以来の行き方と何ら変わるところのないテーゼではあるまいか。いや、貞柳の有名なテーゼ「狂歌を詠むはたゞ箔の小袖に縄帯せるを風体と定めて学べよ」(『狂歌真寸鏡』栗柯亭木端序)と比べても、明らかに数歩後退している。それもそのはず、この書に於いて木網が「狂歌詠み」(天明狂歌師)の必見書として挙げたのは、『堀川百首狂歌集』(池田正式編、寛文十一年刊)『古今夷曲集』(生白堂行風編、同六年刊)『後撰夷曲集』(同十二年刊)『吾吟我集』(石田未得編、慶安二年成)と、何れも未だ室町の遺風から脱し切らぬ近世初期に編まれたものばかりであった。その上で木網は、『浜のまさご』(『冒頭近くに掲げた「地口にならぬやうによむべし」という「教訓」を繰り返し、『古き集」にも地口によ

みたる狂歌も所々にみゆれど、地口になりたる歌はとるべからず」と強調している(この「古き集」には、『吾吟我集』辺りが意識されている)。加えるに、例歌も右の四集を中心に取っているのが該書であった。それらの中には、成立時には先鋭的な言語遊戯であっただろうと思われるものも少なくないが、結果的に成立以来百年余を経て圭角が取れ、微温的な権威・格式を纏った貞徳・未得・行風らの詠草が、あらまほしきモデルとして天明狂歌師たちのハンドブックに並ぶこととなった。そもそも、近世前期の歌語辞典『浜のまさご』を意識したこのタイトルは、木網が志向する所を語って余りあるだろう。

地口・洒落・穿ち、即ち諧謔がその生命であると信じて来た私たちの〈天明狂歌観〉とは、一体何であったのか。それは、後に蜀山人の名で伝説化される大田南畝を中心に、何人かの狂歌師と、限られた狂歌にスポットライトを当てて天明狂歌を語って来た、長い間の偏頗な〈史〉が生み出した幻想に過ぎないのではあるまいか。

天明狂歌の担い手たちの、空前絶後と言うべき尾籠あり不敬ありの狂名がそのようなイメージの醸成に拍車をかけたことは間違いない。実際、天明狂歌を説く概説書の大半は、天明狂歌師の狂名に言及してその幾つかを例示し、南畝歌を中心とする代表的な数首を挙げて事足れりとして来た。言うまでもないが、狂歌と狂名は同列に論じ得ない。もし仮に狂名・戯号が文芸の一種である

とする立場が成立するとしても。

この点に関しては、既に朱楽菅江が『狂言鶯蛙集』（天明五年刊）に、

この頃はらは狂歌を世にもてあそびて殊に戯れたる表徳を云ひ罵るに言葉はさしたるをかしまふし云出さざりければ云々と喝破している所である。これに続く「糞船の鼻もちならぬ狂歌師も葛西みやげの名ばかりぞよき」という歌は広く知られるが、その狂名すらが天明期には「制度」の下に生み出されたのであると、滑稽な狂名の代表例としてしばしばその名を挙げられる朱楽菅江（あつけらかん公）に悪態をつかれてしまうのであれば、天明狂歌のアイデンティティーは一体何処に求められるべきであらうか。

最も単純に言つて、天明狂歌師たちの狂名の多くは面白い、しかし狂歌の多くは面白くない。そして、彼らの狂名の「意味」とは、それらが和歌の伝統（史）に登場する歌人たちの名前のパロディであったということに尽きる。ここでは、先の朱楽菅江の場合が、菅公＝菅原道真であったという例を挙げれば十分であろう。無論、このような前提の上に、本稿冒頭に述べた「智恵内子」という狂名も位置していた。

しかし、菅江や赤良の意志を超えて、ここにも江戸狂歌師たちの権威化への契機が仕掛けられることとなった。寛政期を経て、文化期から顕著となる狂名の堂号・庵号・亭号化へのなし崩しの

変化は、その帰結に過ぎなかった。勅撰集の時代・風俗の、あらゆるレベルでの仮装を滑稽の具として見せたのが、明和から安永にかけて国学者内山樗軒の門に先駆的・原型的に出現した（天明狂歌）であった。しかし、天明期に大挙して現れた自称狂歌師たちは、宮廷歌人・貴族歌人の「雅」を仮装することで天明狂歌の壇に参入しながら、その「雅」を相対化出来ずに、「雅」を仮装する快感にのみ蚕食されて行つたのである。

天明狂歌師の肖像集として代表的な『吾妻曲狂歌文庫』（天明六年刊）と、続く『古今狂歌袋』（同七年刊）の肖像が、あからさまに百人一首の仮装であったことは、この文脈の上で把える必要がある。勿論『万載狂歌集』が勅撰集『千載和歌集』のパロディとして成功したことがこのような仮装への指向を決定づけたのであるが、しかしそれが端緒ではなかったし、形骸化の始まりですらなかった。言わばそれらは、「天明狂歌」の標高を示す水準点にして、同時に墓標だったのである。

右に述べたような「雅」への指向は、何よりも先ず高度な技術を要求される。本来選別されていたパロディの対象は時代の流れに晒されて、もはや余りにも明確なフレームをもち、制度化している。無論それゆえにパロディの対象たり得たのであるが、いかにせん凡庸との距離がありすぎる。言い換えれば「遊び」が人を選ぶのである。狂歌に先立って盛行した川柳には「俗」に居直ることで凡庸なりのおかしみがあり得たし、月並みなりに滑稽感が

漂った。しかし、敢えて「雅」を指向する天明狂歌はそのようなわけにはいかない。楽屋落ちと高い姿勢の笑いの強要は僅かでも外れれば笑うに笑えず、一知半解の知的攪りは下らなさを通り越して悲愴感すら漂う。結局、自称狂歌師たちがそこから逃げたのは、理の当然であった。

そのようにして逃げた先の一つが、例えば「めでたさ」であった。「めでたさ」をテーマにした狂歌は、だから既にして「天明狂歌」ではない。繰り返すが、「天明狂歌」とは、「雅」の衣裳を借りてこれに対峙しようとする不敵な意志を秘め、高いテンションの上に危ういバランスを保った狂詠の、言わばあらかじめ失なわれた幻想であった。確かに天明期以降の夥しい狂歌の多くは、「めでたさ」をテーマに詠まれることとなった。久保田啓一氏の論〔「めでたさ」の季節——天明狂歌の本質〕「語文研究」55、一九八三年）は、その意味で卓論であった。しかしそれは、当代の地本の大半が新春刊行を慣例・吉例とするという大枠の中で、狂歌集の多くが歳旦集化したことによる帰結であった。加えるに、更に大きな枠組みの中で狂歌は題詠化した。狂歌集の大部分が、歳旦集を含めて題詠歌集であった結果として。

それでもなお、従来の天明狂歌幻想を物差しに用いて天明期に詠まれた狂歌を測ることは、量的には可能であろう。しかしそのような計量化から結論を導くのであれば、おそらく天明期に詠まれた狂歌の九十九パーセントは「天明狂歌」ではなかったという

ことになるはずである。

言い換えれば、危ういバランスを保ち得なかったがゆえの天明「風」狂歌という倒立の内に、「天明狂歌」の本質はある。もし天明期に詠まれた狂歌の総合からその性質を抽出するならば、それは大方にして狂歌一般と怪誕なく、つまり「天明狂歌」たり得ない。また、天明期に詠まれた狂歌を純粹に数量的に計量するのであれば、その傾向は例えば「めでたさ」を指向するかも知れない。如上、狂歌集の大半が歳旦集であったのだから当然である。しかし、もはやそこに狂歌の「天明」性はなく、そうであれば、それらは「天明狂歌」ではなかった。

かくて狂歌は、近代に至って終息するまで、その殆どが歳旦狂歌を含む題詠歌であり続けたのである。それは言い換えれば飽くまでも凡庸と月並みを許容するということであり、二人目三人目の四方赤良の出現を拒否するということであった。月並みであって構わない。むしろ月並みでなければならぬ。何よりも「連」或いは「社」という共同体の安穩のために。否、より以上に「私」の安堵のために。いくらでも同じような歌、どこかで見たような歌が並んでいて構わない。何年経とうと代わり映えしなくて構わない。そのような再生産システムの運動の中で、狂歌のコトバは弛緩し希薄化した。供給システムと受容システムは野合して、狂歌集は、本の形をした伝言板化した。

因みに、狂歌がなぜ近代に至って衰滅したかとはしばしば問わ

れて来た間であった。答えは二つ。近代文学はパロディを許さず、もじりがひどく下賤なふるまいとなったからである。もう一つは、今述べた通りである。

狂歌師の多くは点著化し宗匠化したのであるから、彼らには張り争いが、門人たちには撰・非撰に関わつての幾許かの緊張が存したであろう。しかしそれらは、いずれにしても、もはや文学の問題ではない。

六

このようにして、江戸狂歌はその生産の〈場〉だけが限りなく拡散し、それぞれに月並み狂歌が飽くことなく再生産され続けた。そんなセクト化した末端狂歌集を読んでいて、時には秀歌——天明狂歌以上に天明狂歌らしい一首に巡り逢うこともないではない。それらを集めて行けば、天明三年に詠まれた天明狂歌風の狂歌の数より、天保三年のそのほうが多いということも、あるいは起こり得るかもしれない。しかし、この間の狂歌人口の拡大は百倍では収まるまい。これを質的拡散と呼ばずして何と呼ぶべきであろうか。

言われるような、低教養層が大挙して押し寄せたことによる狂歌の低質化、それは確かに一面の真理である。しかし、表層的な真理であろう。先に見た通り、それよりずっと前、内山樗軒門に於ける出発の時点で、そこには〈天明狂歌〉の天明性を解体させ

る契機が時限装置のように組み込まれていた。

言い換えよう。〈天明狂歌〉の生命は、その一首ごとに、またはどれか一首に存するのではない。その意味で、石川淳氏の所謂「運動」は、その本質の一面を鋭く衝いている。しかし、これもまた飽くまでも本質の一面であった。〈天明狂歌〉は解体すべくして解体し、五七七七という形態のみを保ちつつ、狂歌ではあるが天明狂歌ではないものに変貌していった。誰の目にも明らかのように、南畝を中心に天明期に詠まれた狂歌群は、戯文芸としての狂歌の〈史〉において明らかに頂点を形成している。それは、それらが和歌(短歌)の〈史〉におけるもっとも高いテンションの歌群と対決し、拮抗することを目的として詠まれたからである。そしてそれゆえに、歌格の維持は困難、殆ど不可能であった。

一方、〈天明狂歌〉は、本質的に選ばれた者たちにもみ可能な特殊な性質の文芸であった。しかし、もし限定された担い手たちの独占状態が続いても、その内的契機によつて解体したのであろう。そのように、〈天明狂歌〉は独特な〈場〉を作り出すことで〈天明狂歌〉たり得、それがゆえに解体の速度を速めることとなった。このような逆説性・一回性こそ、天明狂歌が〈天明狂歌〉という特別な呼称をもつて呼ばれ続けている所以ではなからうか。

天明初頭の一時期を中心に、折り重なるようにして現れた狂歌群に対する「ちよつと違った感じ」(それは、狂歌自体の「感じ」であると同時に、それらを詠むために突拍子もない狂名の仮面を

被つて、大挙して現れた自称狂歌師の群れや、彼らが集団で行なつた数々のあざけた催しの発する「感じ」でもある）をずっと私たちは抱き続けてきた。——或いは、南畝たちの目論見は、見事に成功したと言えるのかも知れない。

繰り返す。このように《天明狂歌》は、その成立の時点から既に解体の契機を胚胎していた。もし、これが散文形態の戯文芸であつたならば、それでも作者は自ずから選ばれたはずであり、つまり入口は比較的狭かつたと言える。しかしそれでもなお、寛政期以降、化政・天保・幕末へと続く散文文芸の総体としての質的低下は目を覆いたくなる程顕著であつた。一方狂歌は、一見したところ入口が広かつた。だから自称狂歌師たちが殺到した。その権威的傾向に誘引された者も多かつただろう。しかし、彼らが遠くから見たその城は、見た目よりずっと近づきにくかつた。

おそらく、《天明狂歌》が特異な位相と瞬間的な沸騰期、そして高レベルの滑稽を有することがなかつたならば、狂歌という文芸形式は、これほどまでに人を牽き付けずに終わつたであらう。確かにその誘引力こそが現象的な天明狂歌の命取りとなつたと見える。ただしここには《天明狂歌》の本質はない。如上、その本質は、《天明狂歌》そのもののアイロニカルな逆説の内にこそ在つた。

六

《天》と《明》、この能天気にも明るい語構成は一体何なのかとしばしば思う。

本稿の冒頭、私は、その外延そのままの気分が《江戸》に漂つていると書いた。《江戸》とはむしろ都市・江戸の謂である。そしてそのように書いたとき、実はある位相においてアントロピイの閾値を超えてしまつてゐるのは《地方》であつたということと言ひたかつたのである。ある位相。天明期における《江戸》と《地方》との相関は、何と現在における《日本》と《世界》との相関によく似通つてゐることだろう。天明期の狂歌師たちのお祭り騒ぎをもたらしたのは、実は人肉食から逃られぬほどにも追い詰められた《地方》の現実、刻々と伝わり来るその悲惨な情報だつたのではなかつたか。

《平》と《成》、表面的には盤石のようにゆるぎもしない平穩な現実の背後に迫りくるもの、そのイメージが私たちの時代の狂噪のモメントであつたように。また、それに續けて《阪神大震災》《オウム》《沖繩》が照射しているように。

以上、狂歌の事例を一切挙げずに《天明狂歌》を論じた。述べた通り、恣意的に摘んだ数首の検討からは《天明狂歌》の何たるかを論じ得ぬからである。さらには、天明期に詠まれた狂歌を全て列挙したところで、やはり《天明狂歌》の何たるかは理解出来

ないであろうというのが本稿の立場であった。

ただし、言うまでもなく、天明期に詠まれた狂歌が存在せずして「天明狂歌」という概念・呼称が出現するはずもない。その意味で、本稿の論旨は天明狂歌の実作群へと帰納させる必要がある。

「天明狂歌」を語ることには、恰も武蔵野の逃げ水を追いかけるようなもどかしさがつきまとう。石川淳のようにこれをダイナミズムの内に定位する視点は確かに必要であり、重要であった。

しかしそれは、ただ一つのことを語って静止する視点でもあった。「天明狂歌」とは、何よりも「政治」との相互関連の内に探られるべき概念なのではないかと考えるゆえ、序論として、以上の文章を綴った次第である。

(注記)

本稿では、「天明狂歌」と「天明狂歌」を使い分けており、後者が私の考える本質的な天明狂歌を示している。ただし、その定義化が完了するまで、文脈上天明狂歌とのみ表記したものがあることをお断りしておきたい。

(いしがみ さとし 大阪商業大学助教授)

研究室受贈図書雑誌目録(一)

(平成八年一月〜十二月)

単行本

感情・態度を表す日本語音声の表出診断・訓練プログラムの構築に関する研究(細田和雄)

平安日記文学 土佐日記・蜻蛉日記・和泉式部日記・更級日記

総合語彙索引(勉誠社)

「親鸞聖人伝絵」講話(光華女子大学・短期大学真宗文化研究所)

否定・仮定表現の変容 西美濃大垣市における動態と方言のイメージ(国学院大学日本文化研究所)

山梨英和短期大学創立三十周年記念 日本文芸の系譜(山梨英和短期大学日本文学会)

長尾高明先生華甲記念論集 新しい国語教育の基層(長尾高明先生華甲記念論集刊行会)

雑誌・紀要

愛知県立大学文学部論集 国文学科編(愛知県立大学文学部国文学科・愛知県立女子短期大学国文学科) 四四

雑誌・紀要

愛知淑徳大学国語国文(愛知淑徳大学国文学会) 一八、一九

愛知大学国文学(愛知大学国文学会) 三五、三六

愛文(愛媛大学法文学部国語国文学会)

愛文(愛媛大学法文学部国語国文学会)